



「夏の実りを胸に、次への一步を」

～喜びも悔しさも、歩む力へと静かに変わっていく季節を感じながら～

校 長 森角 由希子

残暑の厳しさが続く中にも、朝夕にはわずかに秋の気配が感じられるようになりました。地域の皆様には、日頃より本校の教育活動に温かいご理解とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。一方で、この夏、熊本地震で尊い命が失われ、多くの方々が今なお不安な生活を余儀なくされています。また、千葉県においても記録的な大雨により大きな被害が生じました。犠牲となられた方々に深く哀悼の意を表するとともに、被災された皆様の一日も早い復旧を心よりお祈り申し上げます。

さて、生徒たちは地域のお祭りやボランティア活動に参加し、多くの方々に支えていただきました。地域の一員として役割を果たす経験は、子どもたちにとって大きな学びとなりました。温かい励ましの言葉をかけてくださった皆様に、改めて感謝申し上げます。

また、部活動では、県大会やコンクールで目覚ましい活躍が続きしました。特に3年生にとっては最後の大会となり、これまで積み重ねてきた努力をすべて注ぎ込む姿が印象的でした。進路選択が本格化する時期と重なり、迷いや不安を抱えながらも、練習と学習を両立しようと懸命に取り組む姿は、周囲の心を強く打つものでした。保護者の皆様からは「青春のおすそ分けをもらったようで嬉しかった」との言葉もいただき、生徒たちの頑張りが周囲の活力にもなっていることを実感いたしました。

こうした生徒たちの努力を支えるため、7月後半から行われた三者面談との日程調整を行いながら、教職員も大会やコンクールに向けて練習・引率に奔走しました。保護者の皆様には、送迎や体調管理など多方面でご協力いただき、心より感謝申し上げます。その支えがあったからこそ、生徒たちはそれぞれの思いを胸に大会へと向かうことができました。

そうした多くの思いが重なった大会だからこそ、試合の結果は胸に深く響きます。特に3年生にとっては最後の大会であり、敗れた瞬間に押し寄せる悔しさは、言葉では言い尽くせないほど大きなものがあります。その悔しさが残る中で、負けた直後のチームが審判を務める場面があります。気持ちの整理がつかないまま笛を吹かなければならないこともあり、判定を下すたびに試合の現実が胸に押し寄せます。また、生徒だけでなく顧問も、自分のチームの結果を受け止めながら、役員として大会運営を支えたり、審判を務めたりすることがあります。胸の内に複雑な思いを抱えながらも、最後まで責任を果たそうとするその姿には、言葉では表しきれない葛藤と、それでも前へ進もうとする強さが伝わってまいります。

頑張ることは嬉しさと同時に辛さも伴いますが、その両方を経験したからこそ、次の一步を踏み出す力が生まれます。この夏に積み重ねた思いと経験が、2学期の学びや挑戦を支える確かな土台となり、生徒一人ひとりの歩みをそっと後押ししてくれることを願っております。これからも、子どもたちが自分らしく力強く成長できるよう、学校として全力で支えてまいります。

【7月修学旅行にて】

